

<Translation> William Clowes, A Short and profitable Treatise touching the cure of the disease called (Morbus Gallicus) by Vnctions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米村, 泰明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/283">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/283</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 翻訳

ウィリアム・クロウズ著

『簡潔にして有益なフランス病と呼ばれる病の塗布剤による治療に関する論考』

William Clowes, *A Short and profitable Treatise touching the cure of the disease called (Morbus Gallicus) by Vnctions*

米村泰明訳

YONEMURA, Yasuaki

### はじめに

ここに訳出するのは、1579年に出版された、16世紀イングランドの外科医ウィリアム・クロウズ(William Clowes, 1540-1604)の著書 *A Short and profitable Treatise touching the cure of the disease called (Morbus Gallicus) by Vnctions* (『簡潔にして有益なフランス病と呼ばれる病の塗布剤による治療に関する論考』)<sup>1)</sup>の第一章から第六章である。クロウズはエリザベス朝を代表する医学者の一人である。12歳から外科医の修業を始め、文中にもあるロンドンの聖バルトロメオ病院の外科医を務めただけでなく、戦場にも赴き(アルマダ海戦にも参加したようである)、女王の侍医にもなっている<sup>2)</sup>。

本書の内容は第一章で梅毒の始まりと感染に関する一般的な見解、第二章で著者の体験による性的交渉以外の感染経路についての解説、第三章で「排出」という治療法の概略、第四章で瀉血、第五章で食餌療法について論じている。第六章では塗布剤による治療法が紹介されており、今回はここまで翻訳する。

以下、第七章で著者が実際に用いた塗り薬の処方箋、第八章では潰瘍の治療後に空いた穴に肉を再生させるための焼灼剤の製法を紹介している。次いでエビローグとして、同時代の医学者で友人でもあるジョージ・ベイカーとジョン・パニスターによる水銀の使用法が掲載されている<sup>3)</sup>。

文中でも触れられているが、梅毒は1494年に戦争を介してヨーロッパで流行が始まり、のちにイングランドでも猛威を振るうこととなった。クロウズの

著作は、ヨーロッパでの発生から80年を経て、医学者の手によって英語で書かれた最初の梅毒に関する論考であるそうだが<sup>4)</sup>。クロウズはこの著作の前書きで、「3年前に友人にせかされて梅毒に関する小論を発表した」と述べているがその小論は入手できなかった。クロウズは1596年の著作のあとがきで、この種の著作を英語で出版することを好まない人々への反論として、母国語で内科・外科の知識を入手できる利便性を説いている。ラテン語で出版することが国際的に名を知られる手法であった時代に、母国語での出版にこだわったのは、医療の現場に立つ著者の信念もあったのだろう。1585年にこの著作の改訂版を出版したのち、1588年には戦場で受けた銃創や切り傷の治療法と、1579年版の拡大版ともいえる性病の治療法についての記述を合わせたやはり英語の書物を出版(1591年と1596年にはその改訂版)、1602年には甲状腺腫に関する書物をこれも英語で出版している。

翻訳に際して1579年版の記述では意味が通じない場合には、随時1596年<sup>5)</sup>版を参考にした。なお注はすべて訳者によるものである。

『簡潔にして有益なフランス病と呼ばれる病の塗布剤による治療に関する論考』

### 第一章

フランス病として知られる病の始まりと感染に関して一般的に知られている見解

フランス病と呼ばれている疾患が最初に現れたの

キーワード：ウィリアム・クロウズ、フランス病、治療  
Key words : William Clowes, French Disease, cure

は、(かの学識ある外科医、ヨハネス・ヴィゴ<sup>6)</sup>が断言するように)我らの主の年の1494年12月でありました。当時フランス王はナポリ王国奪還に赴いており、その際に兵士と民衆の間にこの病が現れたのです。当時はフランス人によってナポリ病と呼ばれ、しかしナポリの人々はフランス病と呼び、その名が人口に膾炙し、今日まで残っているのです。これに反論するつもりはありません。というのは、私の唯一の職業は単なる外科医の技であるからです。それによって、わたしは端的に実証済みの治療法を提供したいのです。しかし、このことを言いたいのですが、この病そのものは、私見では、かつてのインド人やナポリ人、あるいはフランスやスペインよりも、今日このイングランド王国においてより猛威をふるっているのです。神が我々を速やかにこの病から救い出してくださり、それを生み出し、養い、拡散させ、そして（最上の治療法が施された後でも）神の正しい審判により再び新しい始まりとなる汚らしい罪を我々から取り除いてくださるよう祈ります。<sup>7)</sup> 考えるだに驚くべきことですが、どれほど多くの人々がこれに感染していることか、そして日ごとに数を増すことか、それは国家の脅威、国全体の汚れなのです。その原因ですが、好色で獣のごとき乱倫にふける数多のごろつきと浮浪者ほど大きな原因はありえません。ロンドン市における男女を問わぬ多くの卑猥で怠惰な者の汚らしい生活、そして数多の卑猥なエールハウスこそ、そのような汚らしい生き物のまさに巣窟であり隠れ家なのです。なんらかの速やかな対策が講じられなければ、そのような乱れた者どもによって、より良い気質を持つ者が何倍も感染させられ、さらに多くが感染の危機に瀕しているのです。本心から、そして心からの悲しみをもってあえて申し上げるのです。ロンドンの聖バルトロメオ病院では、私と3人の同僚がこの5年間に治療した患者の数は千人以上に上ります。聖トマス病院やこの市のほかの病院でも言うまでもなく、毎日のように数えきれないほど大勢の人々が治療されているのです。<sup>8)</sup> したがって、疑いもなく、主が我々に慈悲を与えたまい、行政に携わる方々が厳しさを持って正し、汚れた罪に厳罰を処し、この国の人々が速やかに神の道に外れた生活を悔い改め

嫌悪すべき罪を去らなければ、間もなく全土がこの最も不快な病気に毒されてしまうでしょう。病院の尊敬すべき大家の方々も私が真実を述べていることを証明してくださるでしょう。同様に私も同僚とともに証言いたしますが、どれほどの心の悲しみを持って日ごと多くの恥ずべき生き物を受け入れていることか。受け入れなければ、彼らは多くの人を感染させるのです。同様の懸念を持って、この重大な罪を抑制することを望んでいるのです。しかしそれでも数は増え続けています。というのは、聖バルトロメオ病院では、受け入れる20人の患者に対して15人が水泡性疾患を持っているのが常態なのです。ですから、どれほど入念に調べねばならないかは、ご自身の健康を気遣い、国の安全を気遣う皆様が判断なさってください。そしてここに私は表明するのですが、私がこの書を著すまさにその理由は、この書を読めば疾患から解放されるだろうと期待する罪に溺れる悪党どもに、その獣のごとき生活を続けさせることではありません。そうではなく、国民を愛しているからこそ、目的のひとつは彼らが速やかに生活を改めるよう忠告することです。さもなければ、主なる神は正当な怒りによっていずれこの病を、この書の方法によっても世界の外科医の技によっても、治療不可能なものになさるでしょう。もうひとつの目的は、不注意な飲食、猥雑な獣たちとの交遊によって感染してしまった善良で哀れな人々を救うことです。そして羞恥心から告白できず、あるいは良い外科医がいない、どのように治療すれば良いかわからない、さらに経済力がないために他に治療を求めることができない人のためです。そして最後に、私は感染したものすべてに救いの道を示したいのです。そしてそうすることによって、神にこの病のこれ以上の拡散をとどめていただきたいのです。本論から踏み外してはいないものの、かくも長くこの病の原因を語ることから逸脱し、この国における大きな増大への不満を述べてしまいました。すべて思慮深い読者の皆様の良き熟慮に委ねます。では私の本来の目的である論考に戻りましょう。

## 第二章

この病気をどのように得るか、その原因と兆候について

この病気は、第一に汚れた女性たちとの交遊から生まれると言われております。それは一般的にはその通りですが、常に真実であり、あらゆる人がそうだというではありません。というのは、私自身知っていることですが、この病気に酷く感染した男女ともに、もっとも疑いの目を向けられる箇所、そしてもっとも初期に感染する場所が清らかで、この病のどのような病弊も様相も見せていないことがあるのです。そのような具合に感染が起きたならば、それらの部位は合理的に考えて当然最初に接触が行われ、その湿り気から腐敗がおきやすく、その柔らかさがあらゆる種類の潰瘍を引き起こすはずで、腫れ物、痛み、腐敗、そして膿疱です。私はまた感染した多くの人々が、体の他の部分には痛みや、膿瘍、潰瘍、悪性の膿疱などその兆候をはっきりと見せていながら、前述の部位には痛みもなく、何の兆候もないのを目撃しております。ですから、この病は清らかならぬ人々との交遊によってのみ引き起こされると断言する見解は正しいものではありません。

幼い子供たちについて何を語るべきでしょう、多くのものが痛ましくもこの病に冒されているのです。しかもなかにはわずか1歳、4歳、5歳、あるいは6歳や7歳の子もいました。そのような子供たちの中で、ある一人の12歳の少女を治療したのは、我らの主の年の1567年のことであります。彼女は酷くこの病に冒され、体中の多くの部位に痛みをもたらす結節、膿瘍そして潰瘍ができており、骨も腐敗しておりながら、疑われるべき部位には何の兆候もなかったのです。また、体力から言ってもそのような行為はできなかつたでしょう。私の考えでは、彼女は他の多くのものと同様に、感染した乳母の汚染した母乳を通して感染させられたのです。というのは、そのような母乳は感染した血液から作られるからです。時には子供が感染を両親から受け取ることもあります。感染した子供に授乳することで乳母が感染させられることも多々あります。というのは、この病には流動する物質があり、それはいったんどの部位にでも入り込むと他の部位へと移動し、決して一

カ所に留まることはないのです。特にその物質が、そのような感染を受け入れる性質を持った部位に触れたとき、またはその作用物質の動きと力が作られ、その形質を受け入れてしまうような影響を受けている患者に刻み込まれたときには、そしてそのようにして自身を体全体に拡散させるのです。この病気は多くの場合、既に感染しているものと飲食をともにすることで口中で生まれ、時には感染者の衣服を身にまとうことで体の他の場所で発生します。ときには、感染者と一緒に寝る<sup>9)</sup>、あるいは感染者が使ったのと同じシーツで寝ることで生まれます。ときには感染者がよく使う便器に腰を下ろすことで感染するともいいます。また、ときにはこの病が既に治癒したものが、感染しているときに着ていた服を着ることで再度罹患するのです。これらの原因を私はあえて書き記しました。というのは、そうすることによってこの論考を読まれる多くの皆様にご注意くださるよう、この件に関して忠告したいからです。そして、(可能な限り)このような機会を避けていただきたいのです。さて、これらすべての外的要因について考えてみましたが、まだ内的要因、すなわちこの病を進行させるものについて語るべきことが残されております。それは肝臓であり、その邪悪な気質であります。それはまるで源泉であり、根であり、泉であるのです。というのは、肝臓において人体のすべての体液の区分がなされるからです。良き混合と気質によって、良き体液が生まれます。同様に、悪しき気質によって、腐敗した体液が生じるのです。そのように肝臓から栄養物質と体全体を育成する力が生じるのです。そしてその点において、それが生命の維持なのです。ですから、疑うべくもなく、肝臓の腐敗こそこの病の根源なのです。

もしも、この病は前述の外的要因、すなわち飲食、衣服、感染した母乳などによって得られるのであるから、肝臓が原因ではないと反論する向きがあれば、私の答えは次の通りです。どのような外的な部位もいったん感染すれば、病はすぐに血液の中に入り込み、そして潰瘍のように進み、ついに肝臓に到達します。そしてそこにいったん入り込むと、血液の源泉を腐敗させ、そこから静脈を通して体のすべての部位に感染を送り出すのです。このように始まり、

あるいは治療の後にも、このように成長するのです。というのは、たとえ一カ所でも完全に治癒せずに残されれば、この病は再び戻ってくるのです。そして病を最初のときよりもさらに危険で治療しにくいものにしてしまいます。

しかし、滞りなく主題に戻れば、この病気には他のものと同様に、3つの原因があります。ヴィゴが『浮腫』の第2章の最後に記載した通りです。すなわち、根本的原因、先行的原因、そして結合的原因であります。私が思うところでは、次のようになります。

1. 根本的原因とはなんらかの感染した物体とのなんらかの肉体的接触、あるいは汚染したシーツで寝ること、あるいは感染した衣服を着ることです。
2. 先行的原因とは体液です。その質あるいは量の、あるいは双方とも乱れです。
3. 結合的原因とは、そのような原因があるとすれば、腐敗した体液あるいは悪しき質が、影響を与えられた部位に留まり溜まることです。

この病気自体は、多くの人により多様に定義されており、しかし最善の定義は、肝臓の疾病であり、それが生命力を消耗させるということです。その影響はこのようなものです。血液を汚濁させ、全身を毒し、その部位に苦痛と痛み、潰瘍、結節、そして汚らわしいかさぶたを生じさせるのです。その兆候と好ましからざる症状はほとんどの場合、悪臭を放つある種の固さを伴った不快な膿疱が頭や前頭部、額や顔面、あるいはあご、そして体の他の部分、特に局部の辺りや下腹部、あるいは、特に乳幼児の場合には口角にみられます。喉や口の中のできる胼胝状のもの、頭痛、関節の痛み、特に肩甲骨、腰、大腿部、そして膝。痛みはほとんど夜に襲い、日中には止みます。目が覚めたときには、まるで体が碎かれたかのような、ある種の重苦しさや堪え難い痛みを感じます。微熱を帯びるときもあります。恥骨のあたりの腫れ物、多くの場合は結節、骨の腐敗を伴う不快な膿瘍。特に病歴が長い場合はそうです。

膿疱と湿ったかさぶたは、それらの中で支配する体液によって色と性質が変わります。というのは、ときには赤色で膨らみ膨張しますが、その場合には

主に血液が支配しているのです。赤いけれども膨らまず汚らしい中身があり、周囲が乾いていることもあります。その場合には、胆汁が支配しているのです。また色は青ではっきりした形がなく、濃い物質が中にあるときには、ほとんどが黒胆汁から発しているのです。最後に白っぽくて幅が広く柔らかいときには、粘液が支配しているのです。

このようにここまでこの病気について、その始まり、拡散、原因、そして兆候について私が読み、実際の治療で見てきたことを書き記してきました。今や残されているのは、治療について語ることです。それがこの後に神の思し召しを得て続きます。学識ある外科医たちが書き記すように、完璧にかつ整然としたものではありません。しかし、病を得ている患者の助けとなるべく、十分に不足なく表明いたします。これだけは皆様に警告いたします。正直に生きることを十分に意図している人だけがこの書に救いを求めていただきたい。というのは、そうでなければ、神がまさに医学を呪われるからであります。

### 第三章

#### フランス病と呼ばれる病の治療方法、その最初は「排出」

これより先、私がこの論考で扱うつもりの治療方法は、3部からなります。すなわち「排出」「食餌療法」そして「塗布剤の使用」であります。

この3つの方法で最初の「排出」には3つの用い方があります。すなわち、「排泄」「瀉血」そして「発汗」であります。「排泄」が最初にまさに必要です。多くがこの病の治療にこの「排出」だけを使っています。特にこの病に罹ったばかりのとき、そして患者の体質が強健で頑健なときには。しかし、我々は日ごとに体験するのですが、病が継続している場合、あるいは深く根を下ろしている場合、あるいは患者の体質に何らかの虚弱性や弱々しさがある場合、また感染した体液が多すぎる場合や感染物質が体中に広がっている場合には、「排泄」ではほとんど十分ではないのです。それにも関わらず、我々は治療を始める際に「排泄」から始めます。その時には、熟練した内科医や学識ある外科医に相談することが必要です。というのは、あの気高い内科医のヒポクラテ

スがいみじくも言ったように、化膿した体液を排泄することが適切であり、どんなことがあっても、うまく混合されていない、生の物質を移動させてはいけません。

ですから、濃厚なものは薄められるべきですし、ネバネバするものは拭き取られるべきです。詰まっている通路は、適切なシロップや水などの液体で開かれるべきです。そしてこのように膿んでしまった体液は錠剤や飲み薬、あるいは良い下剤を使って、のちに取り除かれるべきなのです。私が治療のこの部分で信頼している専門家や学識ある内科医、あるいは、外科医の指示に従ってください。私はこの時代の学識ある医者のだなたかが、この件に関して使われているすべての処方と手法、そして薬品についての完全なる論考を我々の言語で出版してくださることを願っております。そうなれば治療が完全に行われ、神が嘉みし給えば、この不快な病を我が国と国民から除去できるでしょう。

#### 第四章

##### 瀉血の手順

瀉血に関して、これは「排出」の2番目の種類なのですが、より詳しくお話することが正当であることを願います。これは静脈を切開し、それによって体内のすべての体液、とくに血液を「排出」することができる一般的な方法です。これには多くの注意が必要です。とりわけ以下の3つです。すなわち体力、空気の組成、そして惑星の運行と位置です。

患者の体力は、体のすべての動きの見かけで判断します。つまり、動物的行動、生命維持活動、そして自然的行動であります。というのはもしも患者に感覚と体を動かす力があり、理性と想像力と健全で良い記憶力があれば、彼は動物的行動という点で頑健なのです。同様に、脈拍が強く、呼吸が良好で詰まることなく、無理せずに行われるなら生命維持活動も良好です。自然的行動は混合と送付、そして同化作用です。その兆候とするしは小便、汗、そして内臓からの排泄物でわかります。もしそれらが健康で健全な人のものと似ていれば、それらのすべてが強さの証しとなります。それとは反対に、それらが健全で十全な人と違っていか全く似ていなければ、

弱さを立証することになります。

さらに瀉血が必要な患者が若すぎず、年寄りすぎないということを確認することも適切なことです。というのは、緊急の理由がない限り小児は14歳になるまでは一般的には瀉血させることはありませんし、60歳を過ぎた高齢者も同様です。とはいえそれがこの病ではしばしばあるのですが。

これらを遵守すれば、血液を抜き取ることは適切であり、効果もあり、かつ必要なことです。しかし、これは学識も経験も豊富な外科医の優れた技術と判断を要することなので、ここで私は親愛なる読者に十分に留意なさるように忠告いたします。瀉血を引き受けるという誰にでも任せて良いということではないのです。

というのは、今日では多くのものが浮浪者、ごろつき同然なのに、無法にもまた無分別にも他のものの職業に足を踏み入れているのです。<sup>10)</sup> すなわち、訓練を受けたことも経験もないのにその技術の業務をしているのです。大勢が恥知らずにも平然とした顔つきで、卑しむべき気質で、動物並の理解力しかないくせに、塗装工、ガラス職人、指物師、そして私が思うに、鋳掛け屋や靴職人どもが、深く深く紛れ込んでいます。これは高貴な知識の分野をはなはだしく棄損し、正直な外科医の名誉を大いに傷つけ、多くの貧しい病に苦しむ人々を危険にさらし、それどころか、破滅させてしまうことなのです。これらの人々を、お世辞たらたらの美辞麗句でまるで木偶の坊のようにだまし、残酷にも苦しませ、国家のために大いに苦勞し、経費を払い、痛みに耐え、すべての時間をつぎ込んでその特殊技能を伸ばし、技術を完全に身につけた他の人が得たものによって雄の蜂のように甘い汁を吸うのです。<sup>11)</sup>

そして私はここで特定の人物に触れることはしまいと決心していたのですが、しかし悪名高いペテン師、下劣な策略を弄するValentine Razeworme of Smalcald<sup>12)</sup>の名前を見逃す訳には行きません。この男は内科医、外科医、眼科医、結石摘出医を名乗り、もっとも恥ずべき手段で女王陛下の善良な臣下を辱めたのです。獣のごとき厚かましきをもって、誠実さも人の命をも歯牙にもかけず、巧みに冷酷に立ち回り、金のために多くの正直な人々の寿命を縮めた

のです。そして利益を得るために大勢の他の人々を堪え難い苦痛で苦しめ、そしてとうとう自分の欺瞞が世の人々の目に明らかになると、一目散に逃げ出したのです。彼のしたことだけで、このような大ぼら吹きに気をつけろという正直な人々への十分な教訓となるでしょう。そして他の無様な下手糞ども、無知な偽物どもに、何も知らず、教育も受けていない他の人間の商売に首を突っ込むのではない、という見せしめになるでしょう。

そしてすべての知識、特殊技能にはおのずから領域と境界があり、その中で良い秩序が人に変化せず混乱せず、混ざり合わずに己を持するようにと求め願っているのです。ですから、私はすべての人にただひとつの技能を専門とするように勧告いたします。十分な知識を持ち、最善の判断ができ、最大の経験を持つ技能です。そして技能を全く持たないか、持っているもごくわずかな事柄に足を踏み入れないようにしてください。アベレスの作品に描かれた靴が間違っていることを見つけたため、脚や他の部分にも同じように文句を付けられると思い込んだあの靴屋のように。<sup>13)</sup> しかし彼がその身にふさわしい皮肉、その思い上がりに対する愚弄の言葉を受けたように、私はこれらのものが改心するのに間に合うように願うものです。さもなければ、なんらかの大変に痛烈なやり方で、いたいことを耳にし、あるいは肌を感じるようになるでしょう。

ここで再び本論に戻しましょう。瀉血対象者の年齢と体力を考慮したので、次に不可欠なのは空気の組成を遵守することです。ですから、一年のどの時かを見極め、そして空気は熱すぎても冷たすぎてもいけません。なぜなら、熱気は体力を溶解させ、弱めるからです。そして冷気は凝固させ、濃縮させるので、不快なものの放出を血液が妨げることとなります。ですから空気は温暖でなければなりません。

最後に惑星の運行と位置について触れておきましょう。私の判断では、月が切開すべき部位を支配する星座の中を運行しているときには、人間のからだのどの部分にもランセットやナイフを入れるのはとても危険なことです。頭部の静脈を開くのは、月がおひつじ座にいるときです。首の場合にはおうし座、腕の場合には月がふたご座にいるときです。

しかし、以下の3つの規則を特に記しておきます。もしも月が、心臓を支配していると考えられてきた獅子座にあるならば、瀉血するのは危険です。月がふたご座にあるならば、それは腕に関係しているのですが、右腕、左腕とも静脈に触れるべきではありません。3番目に、ほとんどの場合は3つの静脈を切開します。

最初の静脈は橈側皮静脈（とうそくひじょうみやく）でこれは頭の静脈<sup>14)</sup>です。腕の湾曲に現れる上側の静脈で、頭の痛みや病の際に切開します。

第二のものは肝門脈あるいは肝臓静脈<sup>15)</sup>と呼ばれます。前腕の下部にあり、肝臓への障害や疾病がある場合です。

第三のものは正中静脈と呼ばれ、前述の2つの静脈が結合したものです。頭と肝臓に関わります、これの切開はそれほどの危険を伴いません。

先の規則に、第四番目としてこれを加えておきます。よほどの危険が迫っているか、差し迫った必要がない限りは、新月や満月の訪れ、あるいは前後の日には瀉血はよろしくありません。これまで皆様に「排出」の最初の2つの種類について簡単にお教えしました、第三のものは「発汗」です。これについては、塗布剤の使用法をお教えしてから扱うつもりです。さて、引き続き、「食餌療法」に関わることで

## 第五章

### 治療における食餌療法

この病気の治療において私がお話ししようとしている第二部は、「食餌療法」です。ここでまず遵守すべきは、患者が用いる食物は消化しやすく栄養があり、糞便などの余計なものを生み出さないものであるべきだということです。白パンについては、ふくらし粉をあまり使っていないもの、古すぎず新しすぎないものであるべきです。ただし、他に意図や目的がある場合は別です。食肉は若過ぎても老齢過ぎてもいけませんし、豚肉や羊肉のように湿り気が多すぎても、牛肉や鹿肉のように乾きすぎてもよくありません。次のものは大変よろしい。乾燥した場所で生育され去勢された羊肉、若い野ウサギ、ウサギ、鶏、去勢した食用雄鶏、めんどり、ヤマウ

ズラ、キジ、ウズラなどの山の鳥です。いずれもローストするか煮物で、塩や香辛料、果物を使ってはいけません。使ってよいのはブルー、天日干しのレーズンとカラント、ほうれん草、パセリ、そして白ピーズです。白パンのかげらで煮汁を濃くして、酸っぱい果汁で味付けをしましょう。

豚肉、塩漬け肉、ビーフ、鴨肉などの野生の水辺に棲む鳥肉は、この場合には健康的ではなく、むしろ大きな害をなします。

魚も多に好まれるものではありません。冷たくて湿っているからです。チーズも消化しにくいのでよくありません。卵も湯に落としたものやブロスに入れたものはとてもよろしい。<sup>16)</sup> 生で汁が多く、冷たい果物は避けるべきです。というのはそういうものは生の体液と腐敗を生み出すからです。すべての甘いワインはこの場合は飲むべきではありません。というのは、血管を塞ぐからです。新しいワインも熱を生み出し、体内で煮え立ちますし、古いワインは栄養になりません。しかし私は、少量の古いエールはこの種の治療に最適で最も効果があることを発見し証明しました。

この治療を行う際に特に遵守しなければならないことですが、もしも患者が虚弱であるならば、毎朝塗布剤で発汗させる前に良い強心剤かエールベリー<sup>17)</sup>を飲ませるのが良いことです。これでもいいし、似たようなもの、たとえばエール、砂糖、卵の黄身をひとつかふたつ、白パンのかげらを一緒に煮込んだものを熱いうちに飲ませましょう。病に伏せる患者の心を慰め、体力をつけ、そしてすぐに発汗を促すでしょう。

大食漢や大酒飲み、途方もない女好きは治療に向いていません。そんな連中は健康を求めるべきではありません。

どんな人であれこの食餌療法に入るときには、患者が横になるための場所を選ばねばなりません。湿った沼沢地、悪臭を放つ排水溝、淀んだ湖、川、そして水源など、腐敗した空気から遮断されている場所です。

部屋を閉め切って外の空気が入ってこないようにし、良い香りと匂いで空気を清めましょう。さて、ここまで治療の第二部に触れてきました。すなわち

患者の食餌療法に関わることです。では第三部、すなわち塗布剤の利用に移りましょう。これでいわば全治療の完成です。

## 第六章

### 塗布の仕方および塗り薬の作り方

この病の治療の第3部は、ここで扱うことを目的としているように、以前に申し上げたように「塗布剤」によって成り立っており、ここで善意を持って簡明に記載しようと思います。塗り薬について述べる前に、まず最初に塗ることに関して私が用いている方法を表明することが最善だと思います。なぜなら私は塗り薬については一カ所で述べるつもりだからです。全部まとめて描写します。

塗り薬を適用する方法は次の通りです。部屋を用意し、前述したように準備します。患者も同様に準備してベッドに寝かせます。石炭で火を十分に焚きます。患者の足の裏から膝まで、そして膝から恥骨まで薬を塗ります、ついで臀部、肩甲骨、両腕に適切に塗り込みます。しかし、この塗り薬が局所に触れないように注意してください。直後に危険な出来事が起きたり、時には死に至ることも目撃しております。

薬を塗り終わったら、患者が良いと思えば、前述のエールベリーを飲ませます。それから患者に十分に服を着せて、ベッドの中にくるみ込みます。発汗を促すためです。そのようにして、2時間か3時間、4時間くらい体力と感染の質にあわせて汗をかかせます。その後、少しずつ熱気を下げていきます。これを2日から3日、状況にあわせてそれ以上続けます。粘液質の物質が口から流れ出してくるまで続け、そうになったら塗り薬の治療は終わらせます。そうしないと、非常に危険なことになります。

これによって歯肉や喉、頬が腫れます。潰瘍は、塗布治療をやめた後で次のようなやり方と方法で治療するはずで、患者にまず口をすすがせます。うがいはこの外用水薬を使います。(処方箋 省略) これを2日から3日用いた後、歯肉と喉を次の外用水薬で完全に洗います。これは私自身が集め、非常に優れていると立証したものです。(処方箋 省略) これを4分の3になるまで煮詰めます。それから火



から降ろし、漉して、保存します。痛みが治まり、歯がしっかりし、口中と喉の潰瘍と粘液の流出が治るまで、これで洗います。その後は冷気に注意してください。というのは特に流出が見られた後は冷気はこの治療には致命的な大敵で、非常な危険を生み出すのです。ここに他の外用水薬を記載しても良いのですが、あまりに煩瑣で全く必要はないでしょう。

このように塗布と発汗の仕方、その後の口の治療法を述べてきました。では、私が読み、試みて最上の実験結果が出た塗り薬について書くことにします。

#### 注

- 1) The English Experience, 443, Theatvm Orbis Terravm Ltd., Da Capo Press Inc., New York, 1972.
- 2) <http://www.st-mike.org/medicine/clowes.html> 参照。これは医療の歴史について広範な収蔵物を持つ Wellcome Historical Medical Museum のサイトである。
- 3) 梅毒の症状は体表に出現するため、皮膚病の一種と捉えられていた。水銀は以前から皮膚病の治療に使われていたので、特に正規の医学教育を受けていない者によって民間療法的に広く使われていた。実害の方が大きかったのだが、皮膚疾患は治癒したように見えるので即効性があると認識されていた。
- 4) Charles Creighton, *A History of Epidemics in Britain*, Frank Cross & Co. LTD., 1965 (2nd ed.), vol.1, pp.414-28.
- 5) The English Experience, 366, Theatvm Orbis Terravm Ltd., Da Capo Press Inc., New York, 1971.
- 6) Giovanni de Vigo (1450-1525) はイタリアの初期ルネサンス期の外科医の先駆的存在。教皇ユリウス二世の侍医になったこともある。1514年の著書は *Vigo's Chirurgy* として1543年に英語に翻訳されており、Folio ClxからClxxiiがフランス病にあてられている。chirurgy は外科の意。
- 7) クロウズは聖バルトロメオ病院での実務経験から、梅毒の根本的な原因が性的乱脈にあることを指摘しているが、同時にイングランド国民の現状に対する神の怒りであるとの見解も捨ててはいない。疫病の発生が不信心な生活にふける人間への神の怒りの表れであるとする見解は、当時のキリスト教関係者や社会改革者に共通する視点である。

- 8) 聖バルトロメオ病院は1123年ころロンドンのミスフィールドに建設された、イングランド最古の病院。クロウズは32歳から40歳までここで医療に従事していた。聖トマス病院は1190年ころロンドンのサザックに建てられた病院。Rotha Mary Clay, *Mediaeval Hospitals in England* (London, F. Cass, 1966), Appendix B, pp.304-305 および <http://www.st-mike.org/medicine/clowes.html>.
- 9) ここでは必ずしも性的交渉を意味しているのではない。単なる物理的な接触だけでも感染する危険性を警告している。
- 10) ここから正規の医学教育を受けていないものが、医療行為を行っている現状に対する批判が述べられていく。ここで列挙されている以外にも、床屋やオイルマッサージ師、産婆、または格闘技家までが医療行為に従事し、医療の頂点に立つ大学での医学教育を受けた内科医たちは、秩序と自らの存在に対する重大な脅威と受け止めていた。Roger French and Jon Arrizabalga, 'Coping with the French Disease', in *Medicine from the Black Death to the French Disease*, Roger French et al., (Ashgate, 1998) pp.249-87.
- 11) 原文は drone bee。雄の蜂は蜜を集める仕事をしないということから、怠け者で甘い汁を吸うものという意味で使われるようになった。
- 12) 不詳。いわゆる quack doctor の一人であろう。クロウズと交友のあった John Read の著書にもここで挙げられているような偽医者が登場するが、その名は Woolfgang Frolicke と記述されている。Charles Creighton, *A History of Epidemics in Britain*, London (F. Cass, 1965), vol.1, p.426。現代英語のつづりで frolic は、「はしゃぐ」「陽気に戯れる」という意味である。ずいぶんふざけた自称である。その伝でいくと、raze worm には「虫を輪切りにする」という意味が読み取れる。Smalcald はドイツ中部のシュマルカルデンを指す。
- 13) アベレスはアレキサンダー大王時代の著名な画家。偉大な芸術家の代名詞として引き合いに出される。ここで取り上げられているエピソードはプリニウスの『博物誌』を根拠にしていると考えられる。アベレスは自分描いたサンダルに誤りがあったことを指摘して鼻高々の靴屋に、「靴屋はサンダルより先のことまで批評してはならぬ」と叱りつけた。中野定雄他訳『プリニウスの博物誌』第3巻（雄山閣出版、1986年）1425ページ。
- 14) 原文は the third wayne。これでは意味が通じないので、1596年版の記述 the head wayne を採用した。

## 翻 訳

- 15) 原文は *Hepatica, or the Lyuer vayne*。現代医学では尺側皮静脈に該当する。
- 16) プロスは肉、野菜、米、魚などのスープ。卵をお湯やプロスに落として、いわゆるポーチドエッグにすればよいのである。
- 17) エールベリーは、エールに種々のスパイスや砂糖をまぜて沸かした、甘い飲み物。